

# 4-1

## 若年性アルツハイマー型認知症利用者の在宅を支える為に

### チームケアとしての認知症デイの役割

若年性アルツハイマー

チームケア

デイサービスセンター マザアス氷川台

ケアワーカー 向田 千衣美

課長 田嶋 精二

東京都東久留米市氷川台2-5-7

相談員 浅香 美絵

TEL : 042-477-7263

E-mail : higashikurume@moth.or.jp

FAX : 042-477-7500

URL: http://www.moth.or.jp

今回の発表の施設  
またはサービスの  
概要 10p

平成6年10月社会福祉法人設立。翌7年5月特別養護老人ホーム開設。同7月併設型一般デイサービスと認知症対応型デイサービスを開所。平成18年度より認知症対応型から地域密着型認知症対応型デイサービスに移行。

#### 〈取り組んだ課題〉

- 若年性アルツハイマー型認知症（N氏）の在宅介護を強く希望している家族を、認知症デイがどのように支援出来るのか。
- チームケアを考える。

#### 〈具体的な取り組み〉

- 【ケース】・N氏 S18年生まれ 女性 介護度4 55～6歳頃、物忘れが始め、57歳時、アルツハイマーと診断される。元々、人の輪に入ることは苦手な性格であった。認知症デイ利用にもかなり強い抵抗（暴言・暴力）を示す中、個別の対応を図り在宅支援を行う。
- 【研究期間】H17年3月～H18年2月
- 担当者会議において援助方針を打ち出す。
  - ・本人の嫌がることはせず、全面的に受容していく。
- 日内変動を把握する詳細な記録（センター方式）を付ける。（薬の変更に伴い、行動の変化を観察していく）
- ケアマネ、家族、訪問介護や実習生の協力、訪問看護との情報交換。（生活連絡表の活用、記録の交換）
- 学生ボランティアや実習生など、様々な人との関わりを試みる。
- 医療との連携を取りやすくする為、かかりつけ医の変更。
- 刺激の少ない環境を提供するために、施設内の空いている部屋を利用してマンツーマンの対応を図る。
- ケアの方向を統一するための認知症デイの中でのカンファレンスを数回実施。
- かかりつけ医を交えての担当者会議実施。
- 家族へ介護者教室（在宅介護支援センター主催）を勧める。

#### 〈活動の成果と評価〉

- 担当者会議の方針によって、N氏に関わる職員のケア認識が統一されていった。
- N氏を支援していく中で、家族を含むチームケアが成り立っていった。（家族、認知症デイ、ケアマネ、訪問看護、ヘルパー、かかりつけ医、実習生、学生ボランティア、在宅介護支援センター）
- 日内変動の詳細な記録を、認知症デイの利用日ごとに付けることで、N氏の行動を振り返ることが出来、アルツハイマーの進行、薬の変更による行動の変化が見えてきた。
- チームケア間での情報交換において、より良いケアを幅広い視点で検討することが出来た。
- 家族と連絡表（その日の様子についての記録）でのやりとりや、送迎時のコミュニケーションを重ねる中で、信頼関係が構築していった。
- かかりつけ医の変更によって、医療との連携が取りやすくなり、医師からも具体的なアドバイスが直接聞けるようになった。（自宅から離れた病院から、近くの病院へ）
- 個室でのマンツーマン対応によって、N氏に刺激を少なくし、安定することが少しずつ見えてきた。
- 家族が介護者教室に通うことで共感し合える仲間が出来、介護にゆとりが出てきた。

#### 〈今後の課題〉

- アルツハイマーの進行に伴い、言葉数が少なくなり、また身体の状態が亢進→在宅支援の継続
- 医療と福祉の「協働」。